生徒・教員の両者にとって持続可能な部活動を②
―内規の運用から半年間を経て―

指導部長　　佐　藤　健　太

1. はじめに

昨年度より本校では部活動のあり方についての検討を継続的に重ね、多忙を極める生徒・教員の両者にとって持続可能な部活動運営を実現すべく、部活動のルールを新たに設け、これまで本校に存在しなかった『部活動内規』の作成に着手した。さらに、スポーツ庁から「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」が公表され、活動頻度・活動時間・休養日等の指針が明確に示されたことを受け、ガイドラインに沿うような形で内規を整備・調整し、昨年度末、無事完成にこぎつけた。今回は昨年度の発表の続編として、内規の運用から半年間が経過した現況について報告を行った。

2. 発表概要

上述の『部活動内規』が 4 月の運用開始から半年を経過し、生徒・教員の負担軽減や安全面の向上にどのようなメリット・デメリットが生じたか、その現状について生徒・教員の両者にアンケート調査を実施し、集計結果を以下の通り発表した。

生徒

- 部活動加入率は 95%、うち兼部率は 51%。「学業、行事との両立が図れている」と回答したのは 81%。
- 部活動に「満足」と回答したのは 1 年 65%、2 年 48%、3 年 33%。一方で 2·3 年生の半数以上が「不満」「どちらともいえない」と回答（特に 3 年生は 20%以上が「不満」と学年間で最多）。
- 不満の理由の多くは「活動時間や日数が少ない」「活動の制約が多い」「兼部が多く活動がままならない」と回答。
- 88% の生徒がお茶高は「ゆる部活」であると回答。

教員

- 部活動業務の負担度に「変化なし」は 82%、これまでの部活指導と「変化なし」も 73%。
- 本校の部活動は生徒・教員両者にとって「両者にとって適切」「教員のみ適切」は各 18%、「どちらともいえない」は 55%、「両者にとって不適切」は 9%。
- 内規のメリットとして、「生徒・教員ともに計画的に（時間に注意して）活動・業務を行うようになった」「部活動間で活動量に格差が生じるのを防げる」等が挙げられた。
- 内規のデメリットとして、「ルールに縛られ融通が利かない」「大会前の練習時間の確保や他校との練習試合の設定がしづらい」「生徒の自主・自律の観点を侵している」等が挙げられた。

あわせて、生徒・教員の様子をみながら、必要に応じて内規の追加・更新を実施していくこと、学校として部活動のスタンスを明確にしていく必要性があることを報告した。

3. 質疑応答

質問は挙がらなかったものの、他校でもガイドラインに沿った部活動運営へとシフトする動きが加速しており、ぜひ参考にさせてほしい旨のお言葉を頂戴した。